

〈論 文〉

大正期における大阪新興財閥の新制度学校設立熱

本 山 美 彦*

I はじめに

1923（大正12）年1月，戦前の日本で最初の私立7年制高等学校の1つが，神戸市の一角（住吉村）に蝟集する大富豪たちによって設立された。それは，政界を牛耳るほどの強靱な人脈が，大阪の新興財界人に形成されていたことを示すものであった。この強大な力が，神戸市東灘区の財産区を，他の財産区とはまったく異なった次元の超富裕区に仕立て上げたのである。

私たちの眼前には想像するのも恐ろしい「超高齢社会」という大苦難が立ちはだかっている。この苦難を乗り切る技術も，資金も，施設も絶望的に不足している。中でも深刻さを増しているのは，昔ならまだ存在していた，地域社会の壊滅的な機能停止である。地域の共同体を一刻も早く回復させないことには，何人も超高齢社会を生き延びることはできない。その視点からすれば，神戸市東灘区に残存する財産区は非常に魅力的なものである。

まず財産区の説明から本稿を始めたい。

「特別地方公共団体」の1つで，かつての共有地（林野，溜め池，墓地）などを管理するのが「財産区」である。全国でも突出して大きい神戸市東灘区の財産区の資産を，富豪たちは，最大限利用してきた。しかし，地元の市民は，その歴史も知らず，「……さん（財産区の代表者）のお陰で地車を今年も曳けると」祝い酒に感謝しているだけである。2019年5月には，財産区や財産区の変形である「一般財団法人」の肝煎りで「御代替り奉祝提灯行列」が組織された。その案内も堂々と地区民会議の広報表示板に掲載されていた。財産区の事態や歴史について，住民ですら，ほとんど関心を示さず，ジャーナリズムで報道されることも滅多にない。

所轄官庁である総務省も，あまり関わりたくないように見える財産区ではあるが，2016（平成28）年4月1日現在で，全国に約4,000区もあり，総面積は，約1万km²もある。1万km²といっても，ピンとはこない人でも，面積の広い兵庫県ですら8,400km²でしかないということを知れば，財産区全体の広大さが分かるであろう。全国の財産区が保有する現金は，1,800億円を超えている。ちなみに，2012（平成24）年時点で，全国の財産区の支配する面積は四国全体に匹敵する18,800km²強もあった。現金も2,200億円を超えていた¹⁾。面積が縮小したのは，共有地が個人

* 京都大学名誉教授

1) 2016（平成28）年の数値は，総務省「財産区に関する調べ」（http://www.soumu.go.jp/main_content/000473575.pdf，2019年3月29日にアクセス）。2012（平成24）年の数値は，同じ総務省のもの（http://www.soumu.go.jp/main_content/000218708.pdf，2019年3月29日にアクセス）。1995（平成17）年の年の「合併特例法」に始まり，2005～06（平成27～28）年にかけてピークを迎えた市町村合併の動きが「平成の大合併」と言われる

の手に渡ったことを意味する。つまり、財産区が誰かに売却されたのである。

『日本経済新聞』（2015年3月3日、関西版朝刊）によると²⁾、記事が出された時点で、神戸市には159の財産区があった。これは岡山市に次ぐ多さであった。『神戸新聞』の記事（2019年2月10日、朝刊）によると³⁾、財産区の数、兵庫県全体で500以上、神戸市で157（2015年より2つ減った）、神戸市東灘区だけで15あった。

上記『日本経済新聞』は、神戸市東灘区の「魚崎財産区」が保有する「基金」の巨額さに瞠目している。基金の規模は17億円、この基金の利息と約200か所ある貸付地の賃料で年間収入は7,000～1億円あった⁴⁾。

同財産区は、域内の小中学校、婦人会、消防団に毎年数十～百万円を寄附してきた。3つある会館は子供会、ダンスなどのサークル活動に開放され、その中の「横屋会館」には、50人は収容できる広い集会室がある。午前中の3時間までなら魚崎区域の住民で2,000円、外部の人は2倍の料金で利用できる。「魚崎わかばサロン」という集会所では、囲碁、将棋ができ、マーサージ機も設置されている。このサロンは区域住民しか利用できない。

神戸市には、10億円以上の基金を持つ財産区は他にも4つある。その中の1つ、灘区の「都賀財産区」は、「だんじり保管庫を備えた都会館を1億9,000万円かけて竣工させた」（同紙）。

1947（昭和22）年に制定された「地方自治法」の第295条には、財産区は議会を設けてもよいとされている。ところが、神戸市では議会を持つ財産区は、魚崎財産区だけである⁵⁾。

財産区はそもそもどのように管理されてきたのか？ どのような権限が政府によって認められてきたのか？ 地区住民はどの程度、財産区の運営に参加することができるのか？ これが私の一連の論考の検討課題であるが、本稿では、財産区を上手く利用できた富豪たちの社交倶楽部が地元の教育機関新設にどう関わってきたのかを吟味することに課題を限定している。

ものである（<https://kotobank.jp/word/平成の大合併-182123>, 2019年3月29日にアクセス）。大合併と財産区の変化についての調査として、泉ほか〔2011〕（74頁）がある。

2) 「豊富な財源、格差を助長——歴史の遺物『財産区』（1）」。

3) 「財産区って何？ 活動と資産、魚崎財産区議長に聞く」。

4) 上記『神戸新聞』のインタビューで、2018年度の魚崎財産区議長は、年間収入が約1億円、貸付地の賃料収入約4,000万円、所有する4つの会館・サロンの使用料収入と基金の利息を合わせた収入が約2,000万円、あとは繰越金であると述べている。議長は、2018年度には、老人会、婦人会、地車保存会など地域の30の団体に約1,100万円を寄附したとも語った。

5) 魚崎財産区議会の議員定数は16名。議員資格は区域に住む25歳以上の人、任期は4年、報酬は月2万円、年2回の予算・決算議会がある。有権者は18歳以上である（前掲『神戸新聞』）。魚崎財産区は、神戸市で唯一の「新財産区」である。東灘区には、旧村有財産を財産区としてではなく「財団法人」として引き継いだ「住吉学園」（旧住吉村の財産を1949年に）と「石屋梅栄会」（旧石屋村の財産を1932年に）がある（久保〔2017〕、598頁）。議会を持つ財産区は、運営の自主権を行使することができる。異議申し立てはできるが、運営については、市町村の議会に従う管理形態が「財産区管理会」である。神戸市の旧財産区の多くは、この管理会方式を採用している。神戸市は、1964年に「財産区の管理及び処分に関する条例」、翌65年に「財産区有財産規則」を制定した。神戸市の管理会のすべては、1965年以降に設置されたものである（久保、前掲、同頁）。これは、旧村から受け継いだ旧財産区の収入が、急速な宅地開発によって激増したために、市民の反発を避けるために採用された策であった可能性が高い（堀〔1994〕、235～36頁）。

Ⅱ 住吉村・御影の富豪たちの広い政財界人脈

大阪～神戸間の官営鉄道が開通した1874（明治7）年から1900（明治33）年までの20数年間、旧住吉村の戸数は、500数十戸前後のまま、ほとんど増えていなかった。村の面積の8割（400町歩）は林野で、耕地は1割以下（90町歩）であった（谷田 [1946]）。

官営鉄道が開通して31年後の1905（明治38）年に、阪神電気鉄道（通称、阪神電車）が営業を開始した。阪神電車は、1908年、阪神間への居住を勧めるPR誌『市外居住のすすめ』を出した。ここで、「市外」とは「大阪市の外」という意味である。

このPR誌には、当時の大阪長谷川病院の病院長、長谷川清治が寄稿している。

「（神戸寄りの）山の手、住吉魚崎辺りより西宮迄は、山の手・海浜共に宜しい。空気は固より清新で、土質も、海浜は砂白く水清く、山の手は砂又は赤土で、飲料水も多く良質である」、また「夙川、芦屋川、深江川、住吉川兩岸、並びに其付近」は、川水も井戸水も最良であると⁶⁾。

少壮気鋭の新聞人であった村山龍平（りょうへい、1850～1933年）が、1900（明治33）年、当時は林野だけの茫漠の地であった御影の郡家（ぐんげ）に数千坪もの広大な屋敷を構えた。住吉や御影の地が住宅地として認知されるよりはるか前のことであった。

実家の村山家は、代々、伊勢の田丸藩の藩士であった。この藩は、紀州徳川家の飛び地領で、5万石が割り当てられていた。藩といっても、なんら自治権を持たず、藩主は紀州の和歌山に住まわされ、伊勢神宮へのお仕え（神馬の納入、お伊勢参りの警護、等々）の役を紀州家から命じられていた⁷⁾。

龍平の父、守雄は、紀州家の藩士に文学を教え、藩学の設立に貢献した。しかし、明治に入ってから、一家は、旧藩士の特権を捨てて、大阪の京町堀へ移住、船舶用機材や雑貨を商う引取屋（買い受け・販売）を開き、後に大阪市西区の戸長も務めた。龍平は、22歳で村山家の家長となり、26歳（1876年）で醤油問屋の木村平八と共同経営で西洋雑貨を扱う「玉泉舎」を設立して事業を拡大、28歳の若さで「大阪商法会議所」（大阪商工会議所の前身）の最初の議員に選ばれた（1878年）。翌29歳の時（1879年）、出資者・木村平八、社長・村山龍平、経営者・木村平八の息子の木村騰（のぼる）の3人体制で『朝日新聞』を創刊した。31歳（1881年）の時、木村親子から朝日新

6) 「阪神間の邸宅街」（https://www.lit.osaka-cu.ac.jp/geo/mizuuchi/japanese/2011_class/Sumiyoshi.pdf, 2019年5月23日にアクセス）。

7) 荘園時代から室町時代までの伊勢平野（宮川の兩岸）の大半は、伊勢神宮の神領であった。しかし、戦国時代になると、戦国武将に領地を奪われるようになり、神領は宮川右岸に残るのみになった。戦国時代が終わり、豊臣時代になると、宮川右岸の神宮領は保護され、太閤検地からも除外された。徳川幕府も神宮領地内を無税とした。遷宮の費用も幕府が負担してきた。神領内は古くから神職による自治組織で運営されるなど治外法権が維持されていた。江戸時代、日本各地で伊勢講が生まれ、フロイス（Luís Fróis, 1532～97年）やシーボルト（Philipp Franz Balthasar von Siebold, 1796～1866年）など、江戸時代に日本に滞在した外国人の多くが、伊勢参りをする人の多さに驚嘆している。江戸中期の記録（伊勢神宮 [1777]）によると、伊勢神宮の檀家数は420万戸に上り、当時の全国の総戸数に89%にも当たっていた。まさに驚異的な伊勢神宮崇拝者の数である。基本的には人の移動を禁じた徳川幕府でも伊勢参りには寛大であった。1830年には、半年間に約500万人が参拝したらしい（相蘇 [1984]）。

間を買い取った⁸⁾。

御影の郡家における広大な村山邸には、貴重な美術品が多数収納されていた。この邸宅で村山が始めたのが、茶道であった。1902（明治35）年、村山は、朝日新聞社の相棒の上野理一（りいち、1848～1919年）、藤田財閥の藤田伝三郎（1841～1912年）を誘って、茶の湯の会「十八会」（18名の会）を立ち上げた。この茶会の例会には、住友財閥の第15代・住友吉左衛門（春翠、しゅんすい、1865～1926年）、白鶴の第7代・嘉納治兵衛（鶴堂、かくどう、1862～1951年）ら富豪18名が集った。

1908（明治41）年には藪内節庵（やぶのうち・せつあん、1868～1940年）という当時の茶道界の大御所（藪内流宗匠）を中心とする茶会の「篠園会」（じょうえんかい）が結成され、持ち回りで30年の長きに亘って茶会が開催されていた。村山龍平（玄庵）、上野理一（有竹）、藤田伝三郎（芦

8) 明治から大正末期までの日本の新聞は、いわゆる「大新聞」（おおしんぶん）と「小新聞」（こしんぶん）の2種類があった。大新聞は政治論議を主な内容にしたもので、位の高いものであるという意味が込められていた。小新聞は、大衆紙を指す。朝日、毎日、読売は小新聞を出発点としていた。1918（大正7）年8月、朝日新聞は、史上有名な筆禍事件、「白虹貫日事件」を引き起こしてしまう。ことは、寺内正毅（てらうち・まさたけ、1852～1919年）内閣による米騒動の報道禁止令への新聞界の反発にあった。寺内は、1910（明治43）年に韓国併合を成し遂げて初代朝鮮総督に就任、帰国後、寺内内閣を発足させ、首相、外務大臣、大蔵大臣を兼任するなど、強靱な権力を握った。1917年2月のボリシェビキ革命（2月革命）の勃発後、ロシア政府を護るためには、他の連合国と並んで日本もシベリア出兵が不可避であると豪商たちは判断し、米の買い占めに走った。暴騰した米価に激怒した富山県の漁村の主婦たちが、米屋を打ち壊すという米騒動が勃発した。この米屋襲撃は全国の大都市に波及し、鎮圧のために軍隊が出動した。そして、寺内内閣が1918年8月14日に米騒動関係の報道を一切禁止するという命令を発した。同年8月25日、86社もの新聞社の代表166人が大阪で抗議集会を開いた。その時の模様を報じた『大阪朝日新聞』夕刊（26日付）の記事が寺内首相を激怒させ、「朝憲紊乱罪」（天皇制国家の基本法を乱す罪）に当たるとし、「発行禁止処分」よりも強い「会社解散」処分を主張した。検事局は問題の記事の筆者である大西利夫記者と編集兼発行人の山口信雄を起訴し、兩人ともに、6か月の禁固、朝日新聞の発行禁止処分を求刑した。右翼組織の「大同団結浪人会」は、朝日新聞社を「非国民」と断じて、その処分に関して司法権を監視すると決議した。

問題の記事には、「『白虹日を貫けり』と昔の人が呟いた不吉な兆しが……人々の頭に雷の様に閃く」という表現があった。それは、中国の戦国時代の闘士たちの言説を集めた『戦国策』という、前漢時代の古典の中の「白虹貫日」という四字熟語から採られたものである。「白虹、日を貫く」と読む。「白虹」とは、霧や驟雨が立ち込める中に見える白い虹のことで、不吉な兆しとされている。「日を貫く」とは太陽に突き刺さっているという意味で、全体としては革命の嵐がいまの王朝を倒すことになろうという内容になる。当時の朝日新聞の村山社長は、当局に対して監督不行届きを陳謝し、社内の肅正を誓った（朝日新聞社 [1969]）。しかし、同年9月28日、新聞社からの帰途、中之島公園内で数名の暴漢に襲撃され、村山が乗っていた人力車は転覆し、村山は暴漢に杖で殴られ、「代天誅国賊」と記した布切れを首に巻かれ、石灯籠に縛りつけられた。暴漢たちは、「檄文、皇国青年会」と書かれた印刷物数百枚を現場に置き去って逃走した。彼らは、「黒龍会」の所属であった。米騒動で倒れた寺内内閣の後を継いで内閣を組織した原敬（たかし、1856～1921年）の斡旋によって、記者たちは2か月の禁固、村山の社長辞任（ただし、一時的）という形で一件落ち着いた（原ほか編 [2005]）。

庵)、第2代目・野村徳七(得庵, 1878～1945年)、山口財閥⁹⁾の第3代目山口吉郎兵衛(滴翠, 1819～1871年)らが常連であった。彼らは、各自が収集した道具を公開すべく、後に村山が香雪(こうせつ)美術館、藤田が藤田美術館、野村が野村美術館、山口が滴翠(てきすい)美術館と、それぞれのコレクションで美術館を造った。単なる豪邸の住人であっただけでなく、関西財界のトップたちの優雅な交流の場が御影で開かれていたのである(神戸っ子 [2018]:朝日新聞本社社史編集室編 [1953])。

村山と並んで、当時の世間の注目を集めたのが、1904(明治37)年に、住吉川兩岸の3万坪におよぶ広大な敷地(甲子園球場の2.5倍の広さ)に超高級豪邸を竣工させた久原房之助(くはら・ふさのすけ, 1869～1965年)である。

日立コンツェルンを築き上げた久原房之助は、同じく萩を同郷とし、後に明治時代の大阪財界の重鎮・藤田財閥となった藤田組の創立者、叔父(父の実弟)の藤田伝三郎を頼った。1891(明治24)年の時である。入社後、閉山寸前の小坂鉦山の経営を託され、それまで棄てられていた黒鉦の新しい精錬法(自溶精錬法と羽口炭)を導入して小坂鉦山を建て直ただけでなく、巨額の利益が上がるように発展させた。驚くほどの巨利を同山が上げるようになったことで幹部から妬まれ、鉦山の私物化を行っているとの批判を受け、久原は、1905(明治38)年12月10日付けで藤田組を退社した。退職金は500万円であった。この金額を藤田伝三郎が10年の分割で支払うという取り決めであった。当時、大学卒の初任給が30円前後だったので、500万円は現在の250億円を優に超える。

久原は、退社の翌日(11日)に、茨城県にあった赤沢銅山を約42万円で買うという契約をした。しかし、500万円の債権を藤田組に対して持っていたとしても、それは10年の分割払いであった。そのために、久原には動かせる買収資金がなかった。それでも、当時、日露戦争のために外債発行に奔走し、後に元老となった親戚の井上馨(1836～1915年)の斡旋で、当時は三井銀行の営業部長であった池田成彬(しげあき, 1867～1950年)らから緊急融資を受けて、同銅山の買収に成功した。銅山は、同月26日に「日立鉦山」と改称した(米本 [1991])。契約後、わずか2週間で巨額の融資を、しかも、日本でトップクラスの銀行から受けたのである。弱冠36歳の若造が巨額の買収をし

9) 戦前まで存在していた旧山口銀行(現在の山口銀行ではない)を中核とした財閥。第4代目の当主、山口吉郎兵衛(1851～79年)の下、元・日銀マンで、報知新聞社長、民政党総裁(1935年)になった町田忠治(1863～1946年)、神戸の子供服販売の大手『ファミリア』を創業した一族の家長で歴代、甲南学園の経営に貢献した坂野兼通(ばんの・かねみち, 1863～1931年)、日本生命会長、東洋拓殖会社の最後の総裁を勤めた佐々木駒之助(1873～1954年)たちが山口銀行総理事となった。官営八幡製鐵の御用商社から総合財閥に転換しつつあった岩井商店で、甲南学園の経営に貢献した岩井勝次郎(1863～1935年)も山口銀行の取締役役に就任した。山口銀行は、大阪で住友に次ぐ第2位行に浮上したが、昭和金融恐慌の直撃を受け、大蔵省の斡旋で、三十四銀行・鴻池銀行と合併し、1933(昭和8)年に三和銀行となった。現在の三菱UFJ銀行の前身の一つである。当時の本店は、三菱UFJ銀行瓦町支店として現存している(https://ja.wikipedia.org/wiki/山口銀行_大阪, 2019年6月4日にアクセス)。

ただけでなく、住吉村に超弩級の御殿を建てたのである¹⁰⁾。

1904(明治37)年、住友家の第3代総理事である鈴木馬左也(まさや、1861～1922年)が、村山と同じ郡家に宅地を確保した¹¹⁾。この郡家(兼安、現兼安公園)には、翌1905(明治38)年、岩井商店の岩井勝次郎も宅地を取得した。いずれも千坪を超える広大な土地であった¹²⁾。

それから少し後の1908(明治41)年、住友銀行初代支配人の田辺貞吉(ていきち、1847～1926年)が、住吉村の反高林(たんたかばやし)に転入してきた。広大な敷地(借地を増やし、初期の2,000坪から5,000坪に増やした)であった¹³⁾。田辺は後の「日本住宅株式会社」になる当時の住宅開発業者(阿部元太郎)と組んで、観音林・反高林一帯の土地1万坪余を1坪わずか7厘、借地権20年の契約を住吉村村会と結び、上下水道を完備した高級住宅地開発に乗り出した¹⁴⁾。

住友家に仕えていた野口孫市(まごいち、1869～1915年)¹⁵⁾が設計した田辺貞吉の邸宅に倣って、以後、陸続と住友の関係者たちが、住吉・御影に邸宅を構えることになった。

この地に豪邸を構えた住友家の政治・経済の両分野に亘る強力な人脈の一例は、第15代当主の住友吉左衛門にも見られる、

1925(大正14)年、住友家の当主、第15代当主・住友吉左衛門がこの地に転入してきた(住友春翠編集委員会[1955])。雅号の春翠(しゅんすい)は、当時のビッグ・ネームであった。春翠の本名は、友純(ともいと)で、西園寺公望(さいおんじ・きんもち、1849～1940年)の実弟である。

幕末期、公家の鷹司輔熙(たかつかさ・すけひろ、1807～78年)の実子で、徳大寺家に養嗣子(家督相続人となるべき養子)になった徳大寺公純(とくだいじ・きんいと、1821～1883年)という公武合体派で右大臣を務めた人がいた。この公純の実子が公望と友純である。兄の公望は西園寺

10) 「数々の大富豪伝説残る『旧久原邸』 — 敷地は甲子園球場2.5個分」『神戸新聞』2019年2月6日電子版NEXT (<https://www.kobe-np.co.jp/news/kobe/201902/0012041079.shtml>, 2019年5月24日にアクセス)。当時の敷地内には果樹園、病院、発電所等が建てられ、小さな本物の機関車を走らせていたと言われている。また、住吉川上流から邸内まで隧道を掘り、冷房用の冷風を引き込んでいた。現在もその隧道から流れる冷水が西岡本の「防災ひろば」内に流れている (<http://www5c.biglobe.ne.jp/~akimitsu/sub5-orchid%20court.html>, 2019年4月1日にアクセス)。久原は、1927(昭和2)年の恐慌後、事業を義兄・鮎川義介(あゆかわ・よしすけ、日産コンツェルン創始者、1880～1967年)に任せて政界入り。政友会総裁になった。戦後は追放解除後、中ソ両国との国交調整に活躍。久原の最初の妻の清子は井上馨の姉の孫で、鮎川義介の妹である。3男10女13人の子沢山で、長女は元衆議院議長・石井光次郎(1889～1981年)と、三女は大隈重信(1838～1922年)の孫で三菱電機専務でもあった大隈信幸(1910～2004年)と、四女は元東京急行電鉄社長・五島昇(ごとう・のぼる、1916～1989年)と、八女は元スタンレー電気社長・北野隆興(たかおき、1921～2001年)と結婚した(久原房之助伝記編集会編[1970])。

11) 鈴木は、1909(明治42)年にも約2,000町歩の土地を買い増した(鈴木馬左也翁伝記編集会[1961])。

12) 「御影郡家について」『月刊神戸っ子』2009年7月号 (<https://kobeco.hpg.co.jp/21610/>, 2019年5月24日にアクセス)。

13) <http://www.eaglehouse.co.jp/0/0/0/m2>, 2019年6月1日にアクセス。

14) <http://www.eaglehouse.co.jp/0/0/0/m1>, 2019年6月1日にアクセス。

15) 野口孫市は、神戸一中、三高を経て、住友家から奨学金を得て、東京帝大造形学科を卒業後通信省に入省する。その後、住友家に請われて「住友本店臨時建築部」(住友管轄、現・日建設計)に入社した。住友本店社屋、大阪府立図書館(現・大阪府立中之島図書館)、住友家須磨別邸、伊庭貞剛邸(現・住友活機園)、田辺貞吉邸(現・武田薬品百草園迎賓館)、鶴崎平三郎邸、大阪明治生命保険会社、大阪倶楽部(初代)、大阪中央電気倶楽部(初代)、大阪心斎橋などを設計した (<https://kotobank.jp/word/野口孫市-1100064>, 2019年6月1日にアクセス)。

家に、弟の友純は住友家の養嗣子となった。1892（明治25）年に住友家に入り、友純は翌93年に住友家当主になった。

徳大寺家には「清風館」という名の別荘があった。友純が1907（明治40）年、徳大寺家より譲り受け、公望の京都での控邸（予備の家）とした。工事は住友の財によって行なわれ、「清風荘」と改名された。公望の没後は住友家によって保管されていたが、1897（明治30）年の京都帝国大学創設時に文部大臣として貢献した公望の遺徳を偲ぶために、1944（昭和19）年に京都帝国大学（現・京都大学）に寄贈された¹⁶⁾。

ここに例示した富豪たちの政財界との堅くて広い人脈が、住吉村、御影という狭い地域から日本全体に号令できる倶楽部を形成していたのである。それは、後述するが、日本初の中高一貫教育の旧制高校を強引に実現させたことに見られるように、強大な影響力を発揮していた。この地の富豪の人脈は、政友会の中枢にも続いていた。

Ⅲ 富豪倶楽部の形成

住吉村の宅地化の進展を、人口増と鉄道駅の乗降客数の変化という指標で示した山本ゆかりの調査研究（山本 [2004]）がある。強い説得力を持つ山本の論考は、人口増については、武庫郡住吉村 [1946] を、鉄道駅の乗降客数については、大阪鉄道管理局 [1954] を、利用している¹⁷⁾。住吉村の人口変化に関しては、山本論考を参照させて戴いた（同、93～95頁）。

16) http://www.landscape.kais.kyoto-u.ac.jp/jila_w/format2.pdf, 2019年3月30日にアクセス。日本で最初の帝国大学は、「帝国大学令」に基づいて1886（明治19）年に創設された「帝国大学」（現・東京大学）である。2番目が、1897（明治30）年創設の「京都帝国大学」。京都帝大は日清戦争の賠償金が設立の大きな資金源であったということが囁かれているが、真相は不明である。設立時にそうした希望があったのは確かだが、実際に基金に組み込まれたか否かの証拠はない。日清講話条約が調印されたのが1897（明治30）年6月18日、当時の西園寺公望文相が、伊藤博文首相に「清国賠償金ノ一部ヲ東京及京都ノ帝国大学基本金トシテ交付セラレンコトヲ請フノ議」を建議したのが、1895（明治28）年6月頃であったので、京都帝大は清国からの賠償金で設立されたと囁かれているのも無理からぬことである。西園寺は、日清戦争中の1894（明治27）年10月に、弱冠45歳で第2次伊藤博文内閣の文相に就任していた。西園寺の建議書も、国立国会図書館憲政資料室に『牧野伸顕関係文書（書類の部）の概要』（リール番号R14no223）として保管されている。そこでは、確かに、大学基本金として、賠償金の内1,875万円が要求されている。この文書は追記で、追って京都帝国大学創立計画案を添付する旨記しているから、講和条約の調印頃には、京大の創立計画が具体的に議論されていたものと思われる（京都大学百年史編集委員会 [1988], 111～13頁）。賠償金の一部は政府の教育基金に組み入れられたが、実際には小学校教育充実のために使われ、京大の創立は直接賠償金に依存したのではない（立命館大学西園寺公望伝編集委員会 [1991], 235頁）。周知のように、西園寺は立命館の創立にも多大の貢献をしている。立命館大学は、西園寺の秘書として京都帝大の創設にも関わった中川小十郎（1866～1944年）が、1900（明治33）年に創設した京都法政学校を出発点とした。同校は御所内に置かれていた。専任教授は置かず、京都帝大の法科大学教授が講師陣を派遣していた。やがて同校は、京都法政専門学校、京都法政大学、そして1913（大正2）年、私立立命館大学と改称した。「立命館」の名称は、『孟子』の「尽心篇」から取った名で、西園寺の私塾の名称であった（<https://www2.city.kyoto.lg.jp/somu/rekishi/fm/nenpyou/htmlsheet/bunka25.html>, 2019年6月1日にアクセス）。

17) 大阪鉄道管理局は、1950（昭和25）年に大阪鉄道局大阪管理部・姫路管理部を改組して発足したものであり、1987（昭和62）年の国鉄民営化まで続いた組織である（<http://c5557.photoland-aris.com/kokutetu-kanrikyoku.htm>, 2019年3月30日にアクセス）。

住吉村の人口は、1900（明治33）年には3,600人程度に過ぎなかったのに、その後、同村の人口は、年々10数%ずつという非常に速いスピードで増加し、明治末期になると20%台へと加速した。1912（明治45年）には7,000人弱とほぼ倍増した（同、93頁、表2-3）。

その後も、加速度を高めながら人口は増加した。1913（大正2）年の6,600人台が、1942（昭和17）年には1万9,000人弱（同、95頁、表2-7）と、まさに目を見張る激増ぶりであった。

山本は、職業別戸数の大きな変化も紹介している。1900～12年の期間、農業戸数が260から208に減少した反面、商業に従事する戸数が166から426に激増、工業も79から101と増加した。1909（明治42）年に新しい分類項目として統計に掲載されるようになった公務・自由業も、同年の159の戸数が明治45年には453に激増した（同、93頁、表2-4）。

職業別戸数は、1913～42年の期間で、さらに大きく変化した。農業戸数が225から22へと消滅寸前にまで激減した。商業戸数も1913年の540から1941年には1,180へと増加していたのに、翌42年には324とこれも急に数値が小さくなってしまった。

反対に、公務・自由業の戸数が1913年の307から42年には1,234と増加し、雑業も17から825に激増したという数値が示されている（同、95頁、表2-8）。ただし、この数値は怪しい。1917（大正6）年には5しかなかったのに、4年後の1921（大正10）年には1,276と激増した数値が記されているし、1900（明治33）年の30が翌年にいきなり144に増えたのに、1909（明治42）年の145が翌1910年には一転して8という小さな数値になっている（同、93頁、表2-4）。これはもちろん山本のミスではない。おそらく、当時の担当部局の統計数値の集め方に厳密性が欠けていたのであろう。

それでも、農家数の激減ぶりははっきりしているし、公務・自由業の激増も納得のいく数値であり、人口・職業の統計から宅地化の凄まじさぶりを感得するには十分である。

人口増加を反映して、住吉駅の乗降客数の伸びは他の駅を凌駕した。

1908（明治41）～1927（昭和2）年の期間における乗車客数と降車客数を合計した人数を見よう。1908年の数値を100とした27年の指数は次のようになる。（ ）内は実数。

大阪駅300（5万7,000人弱）、尼崎駅287（1,900人弱）、西宮駅527（2,400人強）、住吉駅824（6,300人弱）、三ノ宮駅160（1万7,000人弱）、神戸駅155（1万2,000人弱）であった（同、95頁、表2-6）。このように、住吉駅の乗降客数の伸びは、他の駅を圧倒していた。この数値からも、宅地化が猛烈な勢いで進行していたことが分かる。以上が、山本の論考から得られた知見である。

前節の内容を繰り返すことになるが、明治から昭和初期にかけての住吉村は武庫郡住吉村観音林、反高林と呼ばれる林野であった。現在の神戸市東灘区住吉山手、住吉本町、御影郡家がそれに相当する。この点が重要である。

ここで、神戸の地元紙が誇らしげに豪邸の並ぶ地域を語る様子を記しておきたい。

まず、『神戸新聞』の記事「財界の名士が次々邸宅、神戸に『日本一の富豪村』」（2019年2月5日付）。

『神戸新聞』の記事は、「鐘淵紡績」（後のカネボウ）の中興の祖と称された武藤山治（むとう・さんじ、1867～1934年）¹⁸⁾の孫、武藤治太（はるた、ダイワボウホールディングス最高顧問、1937年

18) 武藤山治は、1884（明治17）年、慶応義塾卒業後に渡米、帰国後の1887（明治20）年、一族の武藤家を継ぐ。同年新聞広告取次業で、『ジャパン・ガゼット』新聞記者、「イリス商会」勤務を経て、1893（明治26）年、中上

～) にインタビューしたものである。

氏によると、「東の田園調布（東京）、西の六麓荘町（芦屋市）が高級住宅地と言われるが、昔の住吉、御影は桁違いの邸宅群だった」。

住友邸の北側には、この地の大富豪たちが交流する社交場「観音林倶楽部」¹⁹⁾があった。武藤治太は、「当時の日本の針路はこの倶楽部で決定されていたと言っても過言ではない」と話し、「阪神間モダニズムという独自文化も生まれた」と力を込める。

この言葉は、住吉村の微々たる人数の富豪者たちによって、日本の針路が決められていたという寡頭支配という恐ろしかった時代を懐かしく語っている。しかし、ここではその点には踏み込まないことにする。

1921（大正10）年の『武庫郡誌』（「住吉村住家の概要」）の文章を以下に引用する（山本、同、94～95頁から転載）。

「『即ち住吉地方』に富豪紳士の多く存在すること。全国を通じて最上位なることを証明するものなるべし、是全国有数の別荘地郊外住宅地として、百千の名主を吸収し、酒造の本場として幾多の豪商を有すればなり。従って其住家の如きも、結構宏大にして郡内町村に散在せる別荘に比して一段上位にある。本村にしても観音林、反高林付近の住宅の善美を尽くしたること、恐らく全国首位にあらむ。東京付近の別荘地たる大森鎌倉付近の建築は本村のそれに比すれば甚貧弱の感あり。（省略）、生活の本拠地なればなり」。

上記『神戸新聞』の記事に戻ろう。

「こう話す武藤さんの邸宅は、建築家ヴォーリズ²⁰⁾が建てた洋館のほか、和館、茶室、使用人用の建物があり、5人きょうだいのそれぞれにお手伝いさんが付いていた。『確か、大きな食堂には援助していた画家の絵画があったなあ』」と。

記事は続ける。

「日本一の富豪村。それを裏付けるかのような資料がある。住吉歴史資料館が編集し、住吉学園

川彦次郎（なかがみわ・ひこじろう、1854～1901年）に招かれ三井銀行入行、翌年鐘紡の新鋭工場である兵庫工場支配人に抜擢される。武藤が採用した家族主義的労務管理は、当時としては先駆的事例であった。1921（大正10）年に社長。実業家の主張を政界に反映すべく、1923（大正12）年、「実業同志会」を結成。翌年以降3回に亘って衆院議員に当選。1930（昭和5）年、時事新報社の経営再建に参加、「番長会を暴く」の記事で評判、「帝人事件」論など、政界浄化の主張を次々に発表した。1934（昭和9）年3月、鎌倉で凶弾に倒れた（<https://kotobank.jp/word/武藤山治-17009>, 2019年3月31日にアクセス）。

19) 田辺貞吉や野村銀行頭取の野村元五郎（1887～1954年）らが発起人。2階建ての瀟洒な建物が本部。会費は、普通会员で月3円（現在価値で1.5万円程度）、会員の互選で選ばれる維持会員が10円、婦人会員は1円であった（甲南学園編 [1989], 50～51頁）。

20) ウィリアム・メレル・ヴォーリズ（William Merrell Vories, 1880～1964年）は、米国生まれ、日本で数多くの西洋建築を手懸けた。「ヴォーリズ合名会社」（後の近江兄弟社）の創立者の一人として「メンソレータム」を広く日本に普及させた実業家でもある。YMCA活動を通し、「近江ミッション」を設立。プロテスタントの伝道に従事した。 Hammondオルガンを日本に紹介するなど、音楽についての造詣も深かった。学校関係の建築も多い。京都大学YMC A会館（京都大学基督教青年会館、1913年、その奥に学生の自治寮＝地塩寮がある）、明治学院チャペル（礼拝堂、1916年）、同志社大学アーモスト館（1932年）、関西学院大学ハミル館（1918年）、旧西南学院高等学校旧本館（西南学院大学博物館、1921年）、神戸女学院ケンウッド館（1933年）、旧豊郷町立豊郷小学校校舎（1937年）。伝記として佐々木 [2005] がある。

が発行した『わたしたちの住吉』には、1932（昭和7）年の一世帯当たりの所得税の平均納税額が記述されている。県平均が88円の時代。武庫郡住吉村は1,070円で1位。2位は同郡御影町の286円、3位が同郡精道村（芦屋市）の182円。神戸市は7位の122円だった。住吉村は県平均の約12倍、御影村の約4倍に上り、桁違いぶりを示している」。

（私は御影といっても山手ではない完全な庶民の街である阪神沿線に住んでいる。住吉の住民が御影地区を一段下に見ていると感じることがある。一つの事例を紹介しよう。全国的に有名な「御影石」を住吉の旧住民たちは「住吉石」と呼んでいる。住吉から切り出された石が、庶民の蝸集する御影湊から船で運ばれることから、御影石と呼ばれるようになったことに立腹しているのである。そもそも、低地の御影に御影石が産出するはずはないと。私は乾邸を見学させてもらった時に、案内して下さった方からこの話を聞いた－本山注）。

観音林倶楽部は、大阪財界の有力者たちの社交クラブとして、1912（大正元）年に設立された。会員は多い時で90名を数え、この倶楽部からは、安宅弥吉²¹⁾、久原房之助、平生鈺三郎たち、大臣、貴族院の勅撰議員が含まれていた。本稿第4節で説明する甲南幼稚園・小学校の運営に貢献した人たちも、この倶楽部の会員であった。

Ⅳ 特権的存在であった旧制高校

住吉村の富豪たちの政治力の強さを端的に示す事例として、旧制高等学校、しかも日本初の7年制高等学校の創設がある。

旧制高等学校（以下、高校と記す）は、1950年まで存在していた超エリート学校である。教育内容は現在の大学教養課程に相当した。

戦前の旧制高校、とくにナンバー高校は、帝国大学への進学を保証されている学校であった。旧制中学が入学定員数を順次増加していったのに対し、旧制高校はそれをせず、1学年の定員と帝国大学のそれとは戦前期を通じてほぼ1対1であった。つまり、旧制高校の卒業証書さえあれば、専攻を選ばない限り、どこかの帝国大学に無試験で入学できたのである。戦前の高等教育機関の熾烈な受験競争は、大学入試ではなく高校入試にあった。高校に入ってしまうえばしめたもので、高校生は、バンカラを気取りつつ、戦前社会のエリート層揺籃の場を満喫していた。

類似の制度に大学に附属する大学予科があった。特定の大学への進学を前提にしていたので、旧制高校とは違う別種の学校であった。

その初めは「東京大学予備門」である。初期の予備門の教官は「大臣よりも高い」俸給で雇われた欧米のお雇い外国人たちが占め、カリキュラムはヨーロッパの大学に倣い、教科書、授業、ノート、答案はすべて外国語によるものであった。大学の専門教育を受けるためには、まず、英語やド

21) 安宅弥吉（あたく・やきち、1873～1949年）は、安宅産業や甲南女子学園の創設者。大阪商工会議所会頭。鈴木大拙のパトロン的存在としても知られる。息子の2人は、安宅産業社長となった。娘の登美子は、1925年・1926年の全日本テニス選手権女子ダブルス優勝者である。登美子と結婚した娘婿は、後の住友化学工業の社長になる長谷川周重（のりしげ、1907～98年）。安宅産業は「10大総合商社の一角」にまでに成長したが、弥吉の死後、1977年に破綻し、伊藤忠商事に吸収合併された（<https://ja.wikipedia.org/wiki/安宅弥吉>、2019年6月6日にアクセス）。

イツ語等の高い語学能力が不可欠であり、これを身につける予備教育機関として作られたのが大学予備門であった。

1881（明治14）年の政変²²⁾で大隈重信を失脚させて実権を握った伊藤博文らは、官僚機構を整備するため、東京にある官立諸学校を東京大学に併合し、東京大学を唯一の総合大学である「帝国大学」と改め、ここを官吏、学者の養成学校とした。その直後に整備された第一高校～第八高校は、政財界に卒業生を送り込む、後発の学校よりも優位に立つ特権的な「ナンバー高」であった²³⁾。

もう少し細かく説明しよう。1886（明治17）年の「中学校令」に基づいて、第一高等中学（東京）、第二（仙台）、第三（京都）、第四（金沢）、第五（熊本）という5つの高等中学が認可された。これら5校が、1894（明治27）年の「第一次高等学校令」によって、一斉に旧制の高校に昇格したのである。さらに遅れて六高（岡山、1900年）、七高（鹿児島造士館、1901年）、八高（名古屋、1908年）が追加された²⁴⁾。

竹内〔1997〕は、旧制高校の卒業生が、最高の「学歴貴族」であったとし、帝大入学よりも、旧制高校に入学する方が難しかったと記述している。まさに、旧制高校卒業生は学歴エリート中のエリートで、彼らの入学に当たって、少なくとも、1918（大正7）年までは入学学力試験を課すことはなかったのである。旧制高校こそが帝大への入学ルートであった。

大正中期から後期にかけて、地方から地元の高校を増やせという要求が高まった。その背景には、政党が勢力を伸ばしてきたこと、なかでも高校増設をスローガンに掲げた政友会の勢いが大きく、中央の政治家たちも、そうした要求に応えざるをえなかったと伊藤〔1986〕は指摘している。この指摘は大きい。事実、関西財界の成功者たちは、政友会支持に傾斜していったからである。この点については後述する。

1918（大正7）年、寺内正毅内閣の下で、「臨時教育会議」による「第二次高等学校令」が公布され、次の原敬内閣が、「高等教育機関拡張計画」を実施すると確約し、実際に、この計画に基づいて、17もの3年制の官立高校が認可された（新潟、松本、山口、松山、水戸、山形、佐賀、弘前、松江、大阪、浦和、福岡、静岡、高知、姫路、広島、旅順）。見られるように、これら新しく認可された高校は高校名に都市名を冠することが義務づけられた。

さらに、高等教育機関拡張計画に基づいて、高等科3年、尋常科4年の7年制高校が創設されることになった。それも、それまで官（国）にしか許されなかった高校の設立を自治体と民間にも認

22) 大隈たちが政府の中枢部から追放された事件。1880（明治13）年、民権派の国会開設請願運動は頂点に達し、開設時期に関して大隈は即時開設論者で、慎重論の伊藤博文と対立していた。1881（明治14）年3月、大隈は伊藤に諮らずに急進的な意見を左大臣・有栖川（ありすがわ）宮を経て上奏。これを6月末に伊藤が知り、大隈との対立が激化した。この頃、開拓使官有物払い下げ事件が起こり、民権派の政府攻撃が高まった。反大隈派はこれを大隈が福沢諭吉らと結んで行った反政府陰謀であるとして、10月、大隈とその一派を罷免した。同時に1890（明治23）年を期して国会を開設し、その前に憲法制定を行うという詔書を公にして、プロシヤ的な欽定憲法の制定に乗り出すとともに、開拓使官有物払い下げを中止。伊藤・井上馨を中心とする薩長藩閥政権を確立し、明治国家体制形成のその後の方向を決定した（kotobank.jp/word/明治14年の政変-873436, 2019年6月2日にアクセス）。

23) <https://ja.wikipedia.org/wiki/旧制高等学校>, 2019年6月2日にアクセス。

24) <https://www.weblio.jp/content/旧制高等学校>, 2019年6月2日にアクセス。

めることになった。入学時期もそれまでの9月から4月に改め、以前から4月入学であった専門学校と同じにした。

誕生した7年制高校の数は少なかった。官立では東京高校（1921年創立）、台北高校（1922年）の2つ。公立では、富山高校（富山県立、1923年）、浪速高校（大阪府立、1926年）、府立高校（東京府立、1929年）の3つ。私立では、武蔵高校（1922年）、成蹊高校（1925年）、成城高校（1925年）、甲南高校（1926年）の4つのみであった。

高卒者と帝大入学定員のバランスを数値で確認しよう。年度ごとに変動があるし、参考に使ったのが、1926（大正15）年の入学試験問題を解説した受験者向けの本の付属資料（北辰書院編[1926]）なので、厳密ではないものの、大まかな判断はできる。

まず、一高から八高までの1926（昭和元）年度卒業予定者数の数値を見よう。各高の（ ）内は卒業予定者数である。一高（397）、二高（293）、三高（333）、四高（289）、五高（316）、六高（286）、七高（238）、八高（283）。これらナンバー高、8校の卒業生数合計は2,435人であった。

受け入れ側の帝大を見てみよう。この年、大阪大と名古屋大はまだ開校していなかったし、独自の予科（自校で入学者を育てる方式）に傾斜していた北大、外地の台北大の4校は統計からは除いている。つまり、四帝大だけの入学定員だけを見ることにする。（ ）内の数値は、各大学の入学定員である。

東大（2,363）、京大（1,381）、九大（608）、東北大（392）。4帝大の入学定員合計は、4,744人である。ナンバー高の卒業生数2,435人に対して、4帝大だけで4,744人と2倍近くもある。しかも、ほとんどが入学学力試験はなしである。その恩恵に浴せるのはナンバー高のみであった。帝大の入学資格は、原則として、ナンバー高卒業者に限られていたのである。これでは、ナンバー高に入った途端に、学生は、勉強しなくなる。エリート高校生は遊興に耽っていたとの当時の批判も宜なるかなである。

1919（大正8）年から、17校も新設された卒業予定者数を加味するとどうなるかも見よう。外地の台北高は除外する。

新潟高（151）、松本高（161）、山口高（169）、松山高（159）、水戸高（195）、山形高（220）、佐賀高（205）、弘前高（199）、松江高（141）、大阪高（156）、浦和高（198）、福岡高（189）、静岡高（198）、高知高（196）、姫路高（185）、広島高（180）。新しい高校の卒業生数の合計は、2,912人。

少人数の7年制高校を考慮しなければ、当時の旧制高校全体の卒業生は5,237人になる。帝大の定員が4,744人なので、この数値比較だけでは帝大の定員を旧制高校卒業生がオーバーしているように見える。しかし、官立の医科大の定員を算入するとそうでもない。

1926年時点では旧制の官立医科大学は5校で熊本医科大学はまだ官立に移管されていなかった（熊本を入れて旧制6医大と呼ばれていた）。5医大の入学定員合計は305人であった。大学別に定員を挙げておく。新潟（60）、岡山（60）、千葉（61）、金沢（60）、長崎（63）。5医大を算入すると、官立大学は5,049人。高卒生の方が若干多いが、こと大学入試に関しては、受験地獄とはほど遠い時代であったと言わざるをえない。少なくとも、これらの数値を比較検討するかぎり、官立高校卒業生の進学状況は非常に恵まれていたと断じて、誤りではないだろう。

V 相次いで学校を設置した大阪財界

1910（明治43）年春、私立幼稚園および小学校を住吉村に設立して児童通学の便を図りたいとの要望が富裕者の住民から高まり、有志の間で創立事業計画が練られた。中心となって動いたのは、住友銀行支配人の田辺貞吉、西日本の電気軌道建設を幅広く手掛けて当時電気王と呼ばれていた才賀藤吉（さいが・とうきち、1870～1915年）、日本生命第3代目社長・弘世助太郎（1871～1936年）、平生鈺三郎、大阪保善院を創設した生島永太郎、日本生命専務の岸田空（もく）、阿部元太郎、野口孫市、山口善三郎、それに、中島保之助、小林山郷の11名であった。

発起人たちは、住吉村会の承認を得て、3,900坪もの反高林の村有地を無償で借り受け、費用1万円余りをもって、阿部元太郎の監督、野口孫市の設計で、1911（明治44）年に開園した。園児は44名であった。

翌1912（明治45）年4月、小学校が開校された。開校時は1年生のみで、学級数1組、生徒は僅かに11名であった。

その年の9月、財団法人甲南学園の設立が認可され、理事長には田辺貞吉、理事には小林山郷・才賀藤吉・野口孫市・平生鈺三郎・阿部元太郎の各氏が就任した。その後1か年に1学年ずつ増加し、1917（大正6）年4月になって、小学校6年生までの全学年が揃った（甲南小学校創立四十周年記念誌編集部編 [1955]）。

同年同月、さらに800坪の借地権を購入している。1919（大正8）年4月には、全ての学年の定員（30名）が埋まった。

学園の収入は、月2円（現在価値では1万円）の授業料（幼稚園では保育料）と基本金（有志からの寄付金6万余円＝現在価値で約1億円）の利子のみであった。当初は経営が思うようにならず、多くの発起人や理事が手を引いた。重圧が平生独りにのしかかり、平生は私財を注ぎ込んでいたという²⁵⁾。平生51歳の時であった。

平生は、1918（大正7）年、中学校創立準備委員会を設立し、当時ニューヨークに滞在していた伊藤忠合名会社社長の伊藤忠兵衛（1842～1903年）に寄付金の相談をした。

1918年の神戸地域では、公立では、兵庫県立第一から第四中学、神戸市立第一中学、私立では1918年に創立された滝川中学の5校しかなかった。完全なエリート養成の中学校に新規に割り込もうとするのは、大きな政治力がないかぎり無謀な試みであった。ちなみに灘中の認可は、1927（昭和2）年とかなり遅かった²⁶⁾。

学校の建設地は本山村岡本の二楽荘山麓と決まった。本格的な校舎が完成するまでの仮校舎の建設が始まった。辺りには山裾に沿って昔からの民家がまばらに建ち、二楽荘の東麓には梅林があった。建設地から海岸の村落までの間は、東海道線が一筋走っているだけで、民家もほとんど見当た

25) <http://konan-es.com/museum/>, 2019年6月4日にアクセス。

26) <https://ja.wikipedia.org/wiki/旧制中等教育学校の一覧>（兵庫県）, 2019年6月4日にアクセス。

らない土地であった²⁷⁾。

甲南中学は、海運業者の河内研太郎、安宅商会の安宅弥吉、山下汽船の山下亀三郎（かめさぶろう、1867～1944年）、岩井産業の岩井勝次郎、久原房之助から高額の寄付金を得た。

認可されてすぐの1919（大正8）年4月、入学試験が実施され、124人の受験者中60人が合格したが、25人のみが入学した。授業料は年額50円と決められた。初年度の教員は校長を含めて7人で、付属小学校からの進学者（30人）と外部からの入学者（25人）、計55人を、2クラスに分け、1クラスは以後、30人を原則とした²⁸⁾。

中学創設後、平生は、甲南中学を母体として7年一貫教育の高等学校を設立する準備を進めた。しかし、1920年の戦後恐慌発生により資金提供者の久原が破産、平生や伊藤も自身が経営する企業の業績悪化で、窮地に立たされることとなった。しかし、平生は新たに三菱財閥三代目の岩崎久弥（1865～1955年）、野村徳七らの援助を得ることでこの危機を乗り切り、1923年初めに認可を得て、旧制中学相当の尋常科4年、大学予科相当の文科・理科よりなる高等科3年の甲南高等学校を開校した。その際、甲南小学校から甲南高等学校尋常科への進学は入学試験が免除となった。

1926（昭和元）年4月には私立高等学校のトップを切って第1回卒業式が挙行され、43名が卒業した。しかし、東京帝大への進学を希望する甲南高校の生徒について、東京帝大は、当初「私立学校出身者の受験は前例がない」として甲南高校出身者を門前払いしようとした。校長の粘り強い直接交渉によって、漸く、受験が認められた。

少人数教育がたたり、生徒一人当たり100円（現在価値で約50万円）の年間授業料を徴収しても経常費が賄えない苦しい状態が続いた。しかし、100円という授業料は高額すぎた。当然、甲南生の出身家庭は高額な授業料を拠出できる層に限定されるようになり、1938（昭和13）年の調査では出身家庭の富裕度が全旧制高校中、トップとなっていた²⁹⁾。

上で見たように、甲南高校卒業生の進学を東京帝大は快く思っていなかった。これが当時の文部省の本音だったのだろう。ナンバー高をはじめとして、陸続と生まれた地方の新しい高校のいずれもが尋常科を併設する7年制高校になろうとしなかったのも、本音では7年制高校を忌避したい文部省の指導もあったのではないだろうか。

役所の文書なので、明言していないが、それとなく、7年制高校新設への不満が文部省の『学制百年史』に窺い知ることができる（学制百年史編集委員会 [1981]、第3章第4節の3）。この『百年史』の第3章第4節の3のタイトルは「高等学校および専門学校の改革と拡充」である。要点だけ紹介する。

① 1918（大正7）年12月6日の「高等学校令」は、従来と異なり、民間の意見を大幅に取り入れ

27) 西本願寺の第22代法主・大谷光瑞（こうずい、1876～1948年）は、1902（明治35）年に現在の須磨離宮公園の地を買い上げ別邸としていた。1907（明治40）年、宮内庁がこの別邸を武庫離宮に改造するために買い取り、その代替地として光瑞には兵庫県武庫郡本山村（現・神戸市東灘区本山）の村有であった通称「岡本山」の借地権を与えた。光瑞は、借地としてではなく、私有地として15万円で買い上げ、1908（明治41）年に二楽荘本館を起工し完成させたが、数年後に閉鎖してしまった（<https://ja.wikipedia.org/wiki/二楽荘>、2019年6月4日にアクセス）。

28) https://www.e-konan.net/old/party/hokusetsu/news/20110524_1106.html、2019年6月4日にアクセス。

29) https://www.weblio.jp/wkpja/content/甲南高等学校+%28旧制%29_甲南高等学校+%28旧制%29の概要、2019年6月4日にアクセス。

- た「臨時教育会議」の答申を「ほとんどそのままに実現したものである」。
- ② それは、大学予科としての性格が強かったナンバー高校を「高等普通教育機関」になるべく改革することであった。
 - ③ 官だけでなく、都道府県と民間にも高校の新設の権利を持たせる。しかし、民間は基本財産が50万円以上の財団法人であることを条件とする。
 - ④ 7年制高校とは3年間の高等科を基本とし、その下に4年間の尋常科を併設するもので、少人数教育を必要条件とする。
 - ⑤ 臨時教育会議の答申には高校の増設は言及されていなかったが、答申を受けて作られた「高等教育機関拡張計画」が高校の増設を促したのである。新設校は府立高校を除いてその他すべては大正年間のものである（言外に不満が感じられる表現である－本山注）。
 - ⑥ 「いわゆる『地方高校』の激増と、7年制高校の出現とは、旧制の高等学校の社会的性格と教育の質に大きな変化をもたらした。……バーバリズム一色にいろどられた校風から都会的な校風へとといった変化が現われてきた」。
 - ⑦ 生徒数は、1918（大正7）年の6,792人から1936（昭和11）年には1万7,000人に達し、3倍近い増加を見せた。

以上が、『百年史』の要点であるが、「バーバリズム型から都会型」へと高校が変わったという、およそ官庁の使う言葉としてはふさわしくない不可思議な表現の真意はどこにあるのだろうか。都会風になったからと言って、新しい坊ちゃん学校の生徒の学力が上がったかと言えば疑問である。ナンバー高の生徒が享受していた帝大への最短距離の特権を、金持ちの私学の生徒にも与えることへの躊躇を、この暗喩的な表現に見ることは無謀だろうか。なぜ、入学試験をすべての受験生に課すという改革にまで踏み切らなかったのだろうか。

三谷〔1997〕は新しくできた高校の調査結果を述べた。明治後期までは旧制高校への進学動機としては経済的なものは大きくなかった。しかし、1917年から1929年にかけての高校進学者の激増の背景には、強い経済的動機が働いていると。

三家〔1993〕（280頁）は、入学者数の増加を都道府県間で比較した。1917（大正6）年と1925（大正14）年とを比較して、全高校への進学者数は、2,224人から5,449人へと2.45倍にも激増した。同世代での進学者比率（輩出率と表現されている）も、0.32%から0.63%へと1.98倍に増えた。

大阪府の輩出率は全国平均より高く、0.36%から0.69%へ高まったが、増加率は1917年の基本年がすでに高かったので1.91倍止まりと全国平均よりも低かった。

同じ関西でも、兵庫県の輩出率の伸びが全国平均よりも突出して大きかった。基本年が0.30%と低かったこともあるが、1925年には0.77%と飛び抜けて高く、伸び率は2.59%と全国一であった。

関東に比べて、関西、とくに阪神地区の住宅開発の時期、規模、スピードが比較にならないほどの内容であったこと、つまり、阪神間での中間層の顕著な増大が大きな要因だったのではないかと三家は推測している（282頁）。

米田〔1991〕は、神戸市では商業学校が相次いで設立されたが、中学の新設が長い期間なかったという事情も、輩出率の伸びの高さの背景にはあると、中学、高校の新設を拒否していた神奈川県と比較しつつ述べた。

Ⅵ おわりに

7年制の甲南高校の新設が成功した背景に、何があったのだろうか。甲南学園の関係者たちが口を揃えて平生鈺三郎の高潔な人格、教育への情熱、若者への温かい眼差しを称え、平生の努力で甲南高校が発展したと主張されることの強い思いについては、私も甲南で御世話になったので十二分に理解できる。しかし、しかしである。けっして民主国家ではなかった大正時代の日本で、美しい情熱だけで巨額の資金を必要とする学校経営の認可、運営がスムーズに進んだ理由は、それだけで説明できるものだろうか。

平生鈺三郎は広田弘毅内閣の文部大臣（1936年3月～37年2月）であった。軍国主義に一直線に向かわざるをえなかった内閣の閣僚の1人であった。この時の平生の心はいかばかりのものであったのか知る由もないが、それまで、平生は床次竹二郎（とこなみ・たけじろう、1867～1935年）という政友会の中枢部にいた政治家を積極的に後援していたことで有名であった（安西 [2011]）。

床次は、長州閥にことごとく対立した元官僚で、政友会に入党して政治家に転身した人であるが、残念ながら褒める人はいない。政友会を分裂させる政友本党を結成したり、久原房次郎と組んで対立政党である立憲民政党との連立を工作したり、政権を求めて廊下蔭のごとく政界を渡り歩いたという悪評に包まれた人で、「万年首相候補」と呼ばれていた。政治の主導権が代議士から軍部・官僚に移りつつある時代を象徴する人物の1人でありながら、後半生では政党政治への信頼を失わすような失策を行い、「政権亡者」と酷評されていた（松本 [2009], 92頁；大内 [2006], 67頁）。

そうした悪評を承知しながらも、それでも、「私は彼を信じる」と言い切った平生には確固たる信念があったのだろう（安西 [2011], 66頁）。失敗してしまったが、軍部に對抗して政治勢力の大同団結を図ろうとした広田内閣で文相を引き受けた平生にしか分からない人生の微妙な襲があったのかも知れない。

床次の生の声を聞いたこともない私などが訳知り顔に決めつけた発言はすべきではない。人間とは複雑なもので後世の評価などは当てにならない。床次の名誉のために付言すれば、鉄道大臣を経験した床次は、公傷退職者を救済するため鉄道弘済会の創設に尽力し、そのために、5,000円という多額の寄付をしている。灘生活協同組合を発足させ、甲南病院を開設した平生とその姿はダブる。

言いたいことはただ1つ、平生は生き馬の目を抜く政財界を生き延びた人であったということである。その平生を清廉な聖人のごとく扱う歴史認識に私は違和感を覚える。

最後に、明治後期から昭和前期に至る代表的政党であった民政党（正式には立憲民政党）と日本の二大政党を構成していた政友会（立憲政友会）のことを概説して本稿を終えたい。

政友会は、1900（明治33）年、伊藤博文の主導で結成。官僚、地主の支持を得ていた。財界からは、三井、安田、渋沢らの大財閥の支持も得た。以後、伊藤博文、西園寺公望、原敬、高橋是清（これきよ、1854～1936年）、田中義一（ぎいち、1864～1929年）、犬養毅（いぬかい・つよし、1855～1932年）らが政友会総裁として組閣。1939年総裁後継問題で久原房之助（立憲政友会正統派、久原派）、中島知久平（政友会中島派）³⁰⁾の2派に分裂。1940年新体制運動に吸収された³¹⁾。

30) <https://ja.wikipedia.org/wiki/旧制高等学校#7年制高等学校>, 2019年6月5日にアクセス。

31) 中島知久平（なかじま・ちくへい、1884～1949年）は、海軍軍人退役後、中島飛行機（後の富士重工業を経

政友会は三井財閥が、立憲民政党は三菱財閥が資金を賄っていた³²⁾。

政党政治が瀕死の状態の時、軍部と政党との和解を模索していた一群の政友会支持者がいた。平生も久原もその中にいた。彼らはその修羅場に自らを置いていたのである。この苦しい現実を無視して、美しい教育談義に耽り、日本初の7年制高校が岡本の地で造られたという単純な歴史認識の欠如だけは自戒すべきであろう。

参考文献

- 相蘇一弘 [1984], 「おかげ参りの実態に関する問題」『民衆宗教史叢書』雄山閣出版。
- 朝日新聞大阪本社社史編修室編 [1953], 『村山龍平伝』朝日新聞社。
- 安西敏三 [2011], 『平生鈞三郎日記』にみる大正期一実業家の時代精神』『法学研究』（慶応大学法学部）第84巻，第2号。
- 伊勢神宮 [1777], 『師職檀家諸国家数帳』，神宮文庫。
- 伊藤彰浩 [1986], 「大正期『高等教育機関拡張計画』をめぐる政治過程』『教育社会学研究』第41集。
- 泉留雄・斎藤暖生・浅井美香・山下詠子 [2011], 『コモンズと地方自治——財産区の過去・現在・未来——』日本林業調査会。
- 大内力 [2006], 『日本の歴史24 ファシズムへの道』中公文庫新版。
- 大阪鉄道管理局 [1954], 『国鉄阪神間の80年』。
- 学制百年史編集委員会（文部省） [1981], 『学制百年史』帝国地方行政学会。
- 京都大学百年史編集委員会 [1998], 『京都大学百年史：総説編』京都大学後援会。
- 久原房之助伝記編纂会編 [1970], 『久原房之助』日本鉱業。
- 久保はるか [2017], 「神戸市における財産区の現代的機能：神戸市東灘区の事例（1）」『甲南法学』第57巻，第3・4号。
- 甲南小学校創立四十周年記念誌編集部編 [1955], 『甲南学園創立記念誌』甲南学園甲南小学校。
- 甲南学園編 [1989], 『平生鈞三郎——人と思想——』(上)甲南学園。
- 神戸っ子編集部 [2018], 「商人？新聞人？数寄者？茶人？村山龍平の横顔』『月刊神戸っ子』4月号。
- 佐々木伸尚 [2005], 『今生きるヴォーリズ精神』晃洋書房，2005年。
- 鈴木馬左也翁伝記編集会 [1961], 『鈴木馬左也』。
- 住友春翠編集委員会 [1955], 『住友春翠』。
- 竹内洋 [1997], 『立身出世主義』NHK ブックス。
- 谷田盛太郎 [1946], 『住吉村誌』武庫郡住吉村。
- 原奎一郎・林茂編 [2005], 『原敬日記』（第5巻）福村出版。
- 北辰書院編 [1926], 『帝国大学入学試験問題集：最近六年間』（付属資料「帝国大学入学に就て」）北辰書院。
- 堀圭三 [1994], 「財産区問題覚え書き』『立正大学文学部論叢』第100号。

て、現在のSUBARU)の創始者として知られ、政治家に転じてからは大臣や政友会総裁を務めた。立憲政友会所属の代議士となり豊富な資金力で党中枢へ上り、新官僚や軍部寄りの革新派を形成して勢力を伸ばした。長年、政友会を支配していた鈴木喜三郎(1867～1940年)・鳩山一郎(1883～1959年)派への反感を持つ周囲から担ぎ出されたものであり、自ら進んでしたものではなかったと言われている。鳩山は、軍部に迎合しようとする多数派とは一線を画し、軍に近い中島派と対立した。1939(昭和14)年の政友会分裂に対しては、親軍派の政友会革新同盟(革新派、中島派)に対し反中島という点で鳩山と一致した久原(久原派)と同盟して自由党を結成したが、久原は中島以上の親軍派だったため、鳩山は久原とも対立した(<https://ja.wikipedia.org/wiki/中島久平>; <https://ja.wikipedia.org/wiki/鳩山一郎>, 2019年6月5日にアクセス)。

32) <https://kotobank.jp/word/政友会-86549>, 2019年6月5日にアクセス。

三谷博 [1997], 「帝国大学生の国内移動」『年報・近代日本研究・19』山川出版社。

三家その [1999], 「学歴エリートの輩出における地域的要因——大正期における高等学校への進学状況から——」『教育学研究』（京都大学教育学研究科）第 45 号。

松本清張 [2009], 『史観宰相論』ちくま文庫。

山本ゆかり [2004], 「旧住吉村の住宅地開発とその特徴——日本の近代萌芽期における郊外住宅地——」『住宅総合研究財団研究論文集』第 31 号。

米本二郎 [1991], 『伝記久原房之助翁を語る』リーブル。タイトルは Yonemoto Jiro, Denki Kuhara Fusanosuke-oo Kataru.

立命館大学西園寺公望伝編集委員会 [1991], 『西園寺公望伝』（第 2 巻）岩波書店。